

6年制薬学教育における 1年目の実務実習を終えて

日本薬剤師会 常務理事 森 昌平



今般の東日本大震災で被災された方々に、心よりのお見舞いを申し上げますと共に、震災からの1日も早い復興をお祈りいたします。

❖実務実習1年目を振り返って

さて、去る3月に、6年制薬学教育の核であり、初の実施となった平成22年度実務実習が終了しました。震災の影響のあった地域の大学では、第Ⅲ期の実務実習につき、中止或いは中断等の処置がとられました。その点を除けば、1年目の実務実習については大きなトラブルも無く、概ね無事に終了したと考えています。

これもひとえに、指導薬剤師をはじめとする受入施設の関係者や、これまで受入体制整備にご尽力いただいた各地の薬剤師会、病院薬剤師会、そして大学関係者等の努力のお蔭であり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

❖これから実務実習を行う薬学生の皆さんへ

これを読んでいる方で、これから実務実習を行う薬学生の方は多いかと思えます。東大医学部内科の教授であった沖中重雄先生の言葉で、「書かれた医学は過去の医学であり、目前に悩む患者のなかに明日の医学の教科書の中身がある。」というものがありますが、これは薬学にもあてはまると、私は考えています。実習で医療現場に踏み出せば、様々な発見や驚きがあり、更に初めての患者さんを前に、緊張でうまく説明できなかった、などの経験もするかと思います。それらを含め、全て勉強であり、実習での経験を大学での学習、更に社会に出てからの業務に活かしていただきたいと思えます。

❖薬学教育6年制実施等を受けての 今後の薬剤師への期待について

先般実務実習を終えた6年制課程第1期生の方は現在6年生であり、来年4月にはよいよ6年制修了者が社会に巣立つこととなります。この薬学6年制課程修了者の誕生、及び社会情勢の影響等により、薬剤師を

めぐる環境も変化しようとしています。

平成22年3月、厚生労働省の「チーム医療の推進に関する検討会」は、報告書をまとめ、公表しました。本報告書では、薬剤師の役割について「医療技術の進展とともに薬物療法が高度化しており、チーム医療において、薬剤師の専門家である薬剤師が主体的に薬物療法に参加することが、医療安全の確保の観点から非常に有益である」と明記され、現行制度下で薬剤師が実施できる業務例が列記されています。

また、平成24年度から6年制教育を受けた薬剤師が輩出されることを念頭に、「薬剤師の責任下における剤形の選択や一包化、薬物の血中濃度測定のための採血、検査オーダ等の実施など、さらなる業務範囲・役割の拡大を今後検討することが望まれる」としています。

さらに、「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」（平成22年4月30日 厚生労働省通知）では、各医療機関に対し、患者の状況に的確に対応した医療を提供する「チーム医療」を推進していくことを求めています。

このように、医療機関内のみならず、地域においてチーム医療を推進する上でも薬剤師への期待が一層高まっており、既に病棟や在宅医療の現場では、チーム医療の実現化が進みつつある、というのが最近の流れと言えます。こうした流れの中、将来皆さんが、実習を含め6年間の教育で学んだことを土台に、薬剤師として存分にその職能を発揮されることを期待しています。

薬学生NEWS No.4 CONTENTS

6年制薬学教育における1年目の実務実習を終えて	1
薬剤師、薬学生が被災地支援で活躍!	2~5
Pharmaceutical Japan Tour 2011を実施	6
日本薬学生連盟 関西と関東で新入生歓迎会を開催	7
西日本薬学生ネットワーク 交流企画を実施	8

薬剤師、薬学生が被災地支援で活躍！

去る3月11日の東日本大震災発生を受け、日本薬剤師会では、都道府県薬剤師会との連携のもと、被災地への薬剤師派遣等様々な支援活動に取り組んできました。被災地において薬剤師は、その職能を活かして様々な活動を行っています。また、今回の震災に当たっては、多くの薬学生も支援活動に参画しています。

今号では、被災地支援に関連して、薬学生2名を含む4名の方に、レポートを寄稿いただきました。是非ご一読ください。また、本会HPにも、実際に被災地で支援活動を行った多数の薬剤師の活動報告等が掲載されています(本会HP→災害対策本部HP)。是非そちらもご参照ください。



東日本大震災と薬剤師活動

(社)日本薬剤師会 副会長 生出 泉太郎

私は、東日本大震災で、もっとも被害の大きい宮城県薬剤師会会長も兼任しています。私のふるさと石巻市、家人の生まれ故郷南三陸町も壊滅的な被害に見舞われました。

宮城県薬剤師会では、発災後直ちに災害本部を立ち上げて、1998年に宮城県と結んだ災害協定に基づき、県薬務課と打合せを行いました。そこで確認したことは、医療チーム薬剤師班(救護)として、役割は医薬品の仕分け作業、救護所での調剤、避難所での健康相談(OTC医薬品の供給)等です。

そこで、はじめに行ったのは、被災地へ行くための「緊急通行車両」の登録で

す。登録した車(39台)で、支援物資の輸送等に加え、会員の安否確認等も併せて行いました。

今回は、季節的なこともあり、避難所でのインフルエンザやノロウイルス対策に心がけました。初期段階は衛生活動が重要。手洗い、うがいの励行のほか、食事をすれば排泄の問題もあり、トイレの清掃など、衛生管理が一番大事でト



宮城県薬作成のノロウイルス対策用ポスター

イレ掃除も重要な仕事のひとつです。きっかけは、岐阜県から被災地に入ってくれていた薬剤師から「トイレ」の話聞いたからです。トイレが汚れていると、被災者がトイレに行きたがらなくなるから便秘になる。排便を避けるため、食事や水分もなるべく摂らない。すると体調を崩し、精神的な負担にもつながる。私はすぐにトイレ用の消毒・殺菌用の薬剤を調達し、被災地へ向かう薬剤師に持たせました。薬剤師法第1条(薬剤師の任務)には、「薬剤師は、調剤、医薬品の供給その他薬事衛生をつかさどることによって、公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生活を確保するものとする」とあります。

現在、県内の避難所には3万人を超える方が避難されており、夏に向かって食中毒や害虫も心配です。薬剤師法第1条に則っての薬剤師班の活動はまだ続きます。薬学生の皆さんもボランティア活動をしてみませんか。

写真で見る支援活動等の様子



大津波にのみこまれた被災地



避難所となった学校の体育館



救護所での調剤の様子

※支援活動等の写真に関し、特に注釈のないものは、本会HP掲載の支援薬剤師の活動報告書に添付されたもの、および本会関係者が撮影したものを使用。



薬剤師として震災支援活動に参加して——実務家教員の立場から

元福岡大学 薬学部 薬学疾患管理学講座 講師 小田 真稔

皆さん、日本の医薬分業についてどのように考えていますか。私は、日本の医薬分業は、非常に未熟で不安定なものであると思っています。医師の処方箋どおりに「薬剤調製・交付」するだけが薬剤師の仕事であるかのごとく捉えられています。

2011年、分業率65%と数字から見ると、社会に信認されてきたかの様に思える薬剤師ですが、悔しくも、近年、私たちを取り巻く諸問題として話題にあがるのは、医薬分業の是非そのものを問うものばかりです。そんな折、私たちは、東

日本大震災という未曾有の大災害に直面しました。直ぐに、様々な災害派遣医療チームが被災地に派遣されました。医薬分業の現状からその医療チームに当然、薬剤師も十分に配置されると思われましたが、薬剤師の配置は後回しとなり、被災地では薬剤師不足の声が上がったようです。私は、九州山口ブロックの災害派遣薬剤師チームとして宮城県南三陸町に入りました。

活動内容は、避難所における仮設薬局での24時間の調剤業務でした。その薬局にある薬は限られていますが、医師ボランティアから被災者に渡される処方

箋は、お薬手帳の転記であったり、その医師が過去に使用経験があるものであったりと、多種多様でした。つまり、医薬品が限定される被災地では、代替薬を選定したり、処方設計を提案したりすることが薬剤師に求められたのです。薬剤師機能が十分に発揮され、医師からも薬剤師の裁量を重んじてもらえました。これこそが本来の意味でのチーム医療であり、真の医薬分業の姿ではないでしょうか。

医薬分業が国民のために貢献していることは間違いありませんが、まだまだ十分に信認されていないのも事実です。国民や医師などの医療従事者から形に見える薬剤師として義務をつくすことが医薬分業の完成への近道であると思います。皆さんには、病む人に希望と安心を与えられるような、そして社会に信認される薬剤師になってほしいと思います。



薬剤師会の震災支援活動に参加しての思い

東北薬科大学 薬学部 薬学科6年 高橋 千尋

3月31日から宮城県薬剤

師会で震災支援活動を行いました。宮城県薬剤師会会館に到着すると、

驚くほどの数の医薬品や、衛生用品が積み上げられており、全国からの支援を実感しました。本当にありがたいことです。

仕分け作業をしている間も、全国から薬剤師の先生が何人もいらっしゃいました。支援物資の搬入の手伝いをしたところ、翌日は見事に筋肉痛に見舞われました。毎日避難所で、物資の運搬をして



派遣医療チームの定時ミーティングの様子
(岩手県薬HPより)



薬剤師会設置のくすりの相談窓口で、相談に応じる薬剤師



福島県における支援活動従事者への放射線量チェックの様子

いる方々の苦労が忍ばれます。数日後にも大量の物資が届いたのですが、これも手強い相手でした。

避難所に同行する機会もありました。仙台市宮城野区、東松島市、石巻市雄勝町です。宮城野区は物資が比較的行き届いていて、ビタミン剤を届けることが主な仕事になっていました。東松島市では粉ミルクの要請があり、届けると、赤

ちゃんのご家族や避難所のスタッフの方にとっても喜ばれ、私も嬉しくなりました。必要としている方に届けて、初めて意味があるのだと改めて実感しました。旧雄勝町は津波の被害が凄まじく、ほぼ壊滅状態でした。浸水した町は何度か見えていましたが、壊滅した町は初めてで、言葉を失いました。避難所には、医師・薬剤師の先生がいらして、専門家として

出来ることは何なのか、考えさせられます。避難所から日々求められる支援の内容は、日ごとに変わっていたように感じました。

この度の震災では、まだ出来ることは限られていましたが、薬剤師になった後、もし大きな災害があったときは、今回の経験を生かした支援をしたいと思います。

東日本大震災における 薬剤師会の活動を通して感じたこと

東北薬科大学 薬学部 薬学科6年 伊藤 克幸

私は今回、宮城県薬剤師会館で震災時の薬剤師会の活動を見学し、お手伝いさせていただきました。各地方から医薬品や衛生用品等の物資が届くので、その運び出しや整理などを体験しました。場所もあまりないような状態で大量の物資が届けられるので、仕分けや整理が大変でした。普段から、災害時にはどのように整理をして、どう避難所まで物資を届けるのか考える必要があると思いました。

避難所に医薬品等の物資を届ける場合、避難所で必要とされている医薬品が薬剤師会館にあるとは限りません。そ

のような場合、一般用医薬品に関する知識を総動員して、類似した薬効をもつ別の薬剤を選択するというような、柔軟な対応ができるようにしておくことが大切だと感じました。そのために、普段から一般用医薬品に関して知識をつけておくことはもちろんですが、そのような対応ができるシステムを作っておくことも必要なのではないかと思っています。

また、今回、1度だけですが、避難所での薬剤師の活動を見学させていただきました。避難所は人口密度が高く、風邪やインフルエンザ等の感染症が拡大

しやすい環境となっています。そのため、手指の消毒やマスクの着用など、個人でできる対策はできる限り行ってもらわなければならないように感じました。避難所の方々は、自分の健康に対して不安を感じている場合が多いように思います。そのような時に、薬剤師が親身になって話を聞き、適切なアドバイスを与えることで、不安を軽減させることが重要だと感じました。そして、一番重要なのは、避難所の方一人一人と話をするという点だと思います。薬剤師は、避難所に薬を届けることが仕事なわけではなく、そこにいる方々と真剣に向き合う必要があると感じました。

短い期間しか参加できませんでしたが、貴重な体験ができたと思います。この体験をふまえて、薬剤師に何ができるのかということのをこれからも考え続けていこうと思います。



薬剤師によるOTC医薬品の配布
(岩手県薬HPより)



避難所で、避難者に薬の服用方法等について説明する薬剤師(岩手県薬HPより)



神奈川県薬剤師会関係者に加え、同県の薬学生も参加した、横浜港での被災地向け救援物資の仕分け、梱包及び積み出し作業の1場面

薬学生が

本会の被災地への薬剤師派遣活動等を取材

平成23年4月28日、慶應義塾大学薬学部3年の桐山純奈さん、同 下司春奈さん、の2名が、『わたしたちが災害時にできること～医療系学生の模索～』（仮題）との企画の一環で、東京四谷の本会事務所を訪れ、東日本大震災における本会の被災地への薬剤師派遣活動等につき取材を行いました。

今回の取材は、同大の薬学生が、本会の被災地支援活動をHP等で知ったのがきっかけです。その後薬学部をはじめ、同大医療系学部の医学部・看護医療学部の有志も集い、今回の震災で支援を行った医療団体等を取材し、医療系学生が災害時にどのような支援活動が出来るか、医療人はどうあるべきかを考え、対象とする医療系学生に伝えることで、将来の

災害時に冷静・迅速に対応できる人材を増やしていこう、との趣旨で本会等への取材が実施されました。

今般の取材に対し本会では、震災直後に福島県で薬剤師として支援活動に従事した安部好弘常務理事（東京都・薬局薬剤師）が対応し、取材は、本会の被災地への薬剤師派遣方式にはじまり、薬剤師の医療人としてのあり方にまで及び、熱心な質疑が交わされました。桐山さん達は、各団体への取材内容等を取りまとめ、順次下記HPにて公開しており、本会への取材内容は6月中を目途に公開予定です。

- HP → <http://keio-mss-article.jimdo.com/>
- 問い合わせ先 → keio.m.s.s@gmail.com



取材中の一コマ。左から本会安部常務理事、慶應義塾大学桐山さん、同 下司さん。

【災害対応緊急薬袋】
処方履歴が記入されています、
繰り返しご使用願います。

おくすり袋

お名前 様

内用薬 処方履歴

月日	薬剤名	用法	医師 薬剤師
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	

※裏面に外用薬の処方履歴欄があります。

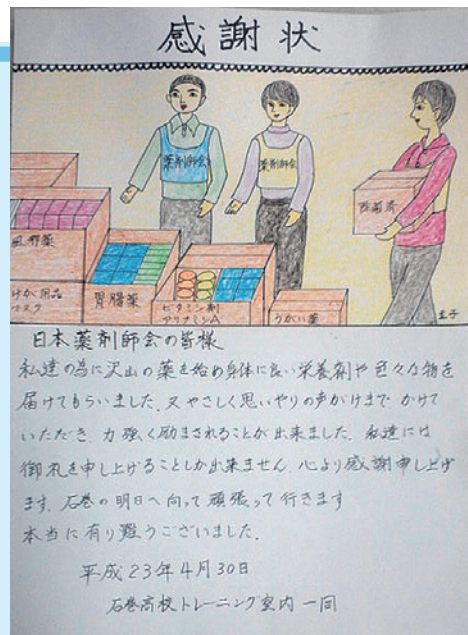
内用薬 処方履歴

月日	薬剤名	用法	医師 薬剤師
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	
1日	錠・包・カプセル	朝・食後	医・薬
毎回	()ずつ服用	()時間毎	

外用薬 処方履歴

月日	薬剤名	用法	医師 薬剤師
1日	塗り薬	塗布	医・薬
1日	塗り薬	塗布	医・薬
1日	塗り薬	塗布	医・薬

緊急の様式として作成され、被災地域の一部で使用されていた「災害対応緊急薬袋」



避難所の小学生から、薬剤師の支援活動に対して送られた感謝状

Pharmaceutical Japan Tour 2011を実施!

7カ国から28名の海外薬学生が来日

開催場所:東京

開催期間:2011年2月13日~18日(5泊6日)

世界7カ国(カナダ、オーストラリア、インドネシア、台湾、シンガポール、チェコ、ルーマニア)から28名の海外薬学生が東京に集結!!

日本薬学生連盟 2010年度国際交流委員長 武蔵野大学4年 齋藤良行

《ジャパントア-とは?》

世界薬学生連盟(IPSF)に正式加盟する日本薬学生連盟主催の国際交流企画として、今年2月に行われました。現在の学生は、内向きといわれ海外に出て行こうとしない!!



イベント冊子

ならば、海外の薬学生を日本に呼んでしまおう!! そうして生まれた企画がこのPharmaceutical Japan Tour 2011(以下ジャパントア-)です。この企画は、海外薬学生に日本の製薬企業や病院、薬局、大学を紹介し、日本の薬学生が国際的な視野と価値観を学ぶ目的で企画されました。

《ジャパントア-の内容》

【1日目】

各国から参加者が到着!!夢のような時間の始まり。少々ぎこちないスタッフの対応もご愛嬌。

【2日目】

この日は武蔵野大学を見学し薬局へ。大学では中込先生による日本の薬学生、薬剤師を取り巻く就労環境についての講義をききました。中には積極的に質問する

海外薬学生の姿も。

薬局見学ではウェルシア三鷹中原店、武蔵野市薬剤師会薬局、蔵王薬局横綱一丁目店、水野薬局に行きました。海外との違いについて参加者たちは興味深々な様子でした。

【3日目】

午前中は秋葉原や後樂園ラクーアにてショッピングを楽しみ、午後は日本が誇る製薬会社エーザイへ!!日本の製薬業界、株式会社エーザイの理念についてのプレゼンはとても興味深く、薬を創るだけでなく患者のことを常に考えるエーザイの精神に海外の薬学生も感慨深げでした。その後の懇親会ではエーザイ社員の方々と交流できる場をセッティングいただき、参加者・日本人スタッフともども非常に貴重な経験をする事ができました。

見学後、茗荷谷駅近くの和風居酒屋「しま川」にて夕食。国別対抗ビール早飲み大会では日本男子がチェコ代表に勝利!!

【4日目】

東京観光♪各班で、明治神宮、原宿竹下通り、渋谷、上野、池袋を観光しました。夕飯は焼肉とすしに別れ、夜は池袋サンシャインにて東京の夜景を満喫!!

【5日目】

ジャパントア-最終日。午前中は病院見学に行きました。5グループに分かれ、NTT東関東病院、昭和大学病院、済生会横浜南部病院、国立がん研究センター



池袋サンシャイン展望台にて

東病院、国立がん研究センター中央病院を見学し、どの病院も日本のトップクラスの設備や取り組みをされているので、日本人参加者ともども非常に勉強になった様子でした。

その後、東京タワーを見学し、Farewell Partyの会場へ。Farewell Partyでは海外薬学生に加え、多くの日本人薬学生・薬剤師を交えた総勢約80名が集ったインターナショナルなパーティーになりました。

【6日目】

あっという間に帰国の日になりました。中には別れを惜しみ涙を流す参加者やスタッフの姿も。

《ジャパントア-を通じて》

企画して本当によかったなあというのが率直な感想です。初日は「私英語喋れない〜」といていた日本人スタッフも、終わるころには積極的に海外薬学生とコミュニケーションをとっていて、鳥肌が立ちました。海外薬学生も日本の薬剤師事情、医療を知れてよかったと非常に満足していて、日本人スタッフも普段経験できない国際活動を通じ、多くのことを学び、非常に良い経験になったと思います。また、参加者全員が薬学生ということもあり、共通の話題があることでお互いコミュニケーションがとりやすかったようにも思います。この企画を通じて、“国際舞台への一歩”をためらっていた学生が、価値観を広げ、もっと国際的な活動をしたくなるように変わったのではないのでしょうか。ジャパントア-に参加した薬学生が国際的に活躍する薬剤師・医療人を目指して、今後の学生生活にこの経験を生かしていければと思います。

さぁみんな世界へ飛び出そう!!



武蔵野大学にて



蔵王薬局にて



エーザイにて



浅草観光



Farewell Partyにて

日本薬学生連盟 関西と関東で新入生歓迎会を開催

「日本薬学生連盟って？」 ～薬学生の質の向上を目指して～」をテーマに



関西会場でのみんな揃っての集合写真



同じく関東会場での集合写真

全国薬学生団体である「日本薬学生連盟 (APS-Japan)」は、第9回日本薬学生連盟関西・関東合同新入生歓迎会を、関西は5月15日(日)に大阪府淀川区民センターにて、関東では5月29日(日)に国立オリンピック記念青少年センターにて開催しました。

今年は「日本薬学生連盟って?～薬学生の質の向上を目指して～」をテーマに、多くの薬学生同士が協力しながら、活発な話し合いをすることができました。

今回のイベントは特に開始までの時間や休憩時間、そして終了後も参加者同士の話し合いに話題が絶えないような雰囲気作りを重要視しました。会場に入ると、こいのぼりの装飾がお出迎えをしてくれます。そして、骨だけになった大きなこいのぼりも飾ってあります。そこに参加者は『今日の目標』をうろこに書いて貼り付けて、こいのぼりをみんなで作りました。他にも、日本薬学生連盟は日本各地から薬学生が集まります。そのため、休憩時間は各地から参加する学生のお土産を食べながら会話を楽しむことができました。終了後も、大きな木の絵に『これからの目標』を書いたリンゴの付箋を参加者が貼り付けて、これからどんなことをしたいかについて話し合うことができました。

プログラムは、新入生だけでなく初めてのイベントに参加する学生の緊張をほぐすアイスブレイクに始まり、『薬学部に来た理由』や『薬学部の卒業後、どんな可能性があるのか?』について、模造紙や付箋などを活用したワークショップをすることができました。

関西ではその後、『薬学部を卒業して活躍している人』について8名の薬学生が紹介し、参加した学生は卒業後の可能性を感じることができました。「その人の講演を聞いてみたい!」「その人が働いている現場に見学しに行きたい!」「自分もそんな活躍がしたい!」という意見が聞かれました。

関東では先日発生した震災を受けて、災害医療の現場で薬剤師としてどのようなことができるのかについてのスモールグループディスカッションなどを行いました。

発表は実際に被災地へボランティアとして向かった日本薬学生連盟のスタッフがいき、そこで感じたこと、知ったことを参加者に伝えることができました。参加者の方からは、「実際に現場の声を聞くことができて勉強になった」などの意見が聞かれました。

このような企画を通して全国から集まった約140名の参加者と共に、薬学生としてこれから自分たちがどのように学生生活を送っていくべきなのか、などについてお互いに考えを深め合うことができました。

活を送っていくべきなのか、などについてお互いに考えを深め合うことができました。

今回の合同新入生歓迎会は、日本薬学生連盟となってから初めての新入生歓迎会となりましたが、会全体を通じて参加者の方からは「新しい視野を持つことができた」、「薬学部としての可能性を多く知ることができた」などの感想をいただくことができました。

日本薬学生連盟は、様々な委員会があり日々活動しています。新入生歓迎会の後も各委員会が施設見学やワークショップだけでなく、薬学生同士で交流することができるイベントを日本各地で予定しています。日本薬学生連盟の活動に興味をもっていただけた方は以下の連絡先までご連絡ください。

Mail(事務局): apsjapan@apsjapan.org

HP: <http://apsjapan.org/>

Twitter: @APS_Japan

(日本薬学生連盟新歓・年会実行委員長 山下浩平, 地域対策委員長 小路晃平)

日本薬学生連盟 今後のイベント予定

9月 薬学生カフェ@名古屋

受験生・保護者対象進路セミナー

*上記以外についても、各委員会では常時活動を行っています。

詳しくは団体HPをご覧ください!



薬学部卒業者の活躍を出席者に紹介(関西)



ディスカッションに際しての説明を聞く参加者達(関西)



開催に際しての野畑代表からの挨拶(関東)



スモールグループディスカッションの様子(関東)

テーマは

災害ボランティア・現場の薬剤師 ～これからの薬学生、薬剤師にできる事～

『西日本薬学生ネットワーク6月企画』が6月5日(日)に常翔学園大阪センターにて行われました。今回は『災害ボランティア・現場の薬剤師～これからの薬学生、薬剤師にできる事～』というテーマで開催しました。前回同様に、知る・考えるばかりではなく参加者同士が交流しやすいものとなるよう心がけ、アイスブレイク、スモールグループディスカッション、交流会などを行いました。

まだ記憶に新しい3月11日に起こった東日本大震災について、誰もが「今、これから私たちにいったい何ができるのだろうか?」と考えたはず。そして、私たちは薬学という学問を学び、将来は医療に従事する方が大多数でしょう。私たちが薬剤師として働くようになり、災害に見舞われたとき私たちはどのような援助ができるのか?という事について考えようと、今回のようなテーマで企画を行いました。そして、実際に東日本大震災の被災地の支援活動に参加された薬剤師の先生をお招きし、現場の状況や薬剤師の必要性・可能性などについて講演していただきました。被災地では、「避難所に必要な薬が行き届いていない」「薬は届いているにもかかわらず、薬剤師が不足しており薬剤管理がうまくできていない」「公衆衛生環境の悪化による感染症蔓延への不安」など、様々な深刻な問題があることについて知りました。また、

これらを教訓とし「薬剤師は被災地において医師・看護師と並び、薬のスペシャリストとして職能を最大限に活かし、災害医療救護活動の中心的存在となる必要があります、そのためには医療用医薬品だけでなく

一般用医薬品(OTC)についての知識や幅広い病態の知識なども重要である」と、これからの薬剤師の展望についてもお話していただきました。私はこの講演を聴講し、災害時の医療において薬剤師の必要性を再認識したとともに、日頃の学習が大切なのだと感じました。その後、1グループ7～8人のスモールグループ形式でディスカッションを行いました。ディスカッションでは多くの参加者が被災地における薬剤師の可能性についてお互い模索しながら、数多くの意見が得られました。「積極的なカウンセリングにより薬や受診の必要性を明らかにする」「各地で薬剤師会と大学の薬学部・薬科大学と協力し、薬学生の有志を募り薬の分別作業を行う」「被災地に行きたくても都合が悪く行けない薬剤師が夜に数時間だけ集まり、供給先の避難所へ



必要薬剤の仕分け『真夜中仕分け』をする」などの意見が出ました。

この会を通し、参加者からは「薬剤師の大切さ、必要性について再認識でき知識が深まった」「将来の薬剤師像を考える良い機会になった」「これからは自分たちがどんどん前に出てアピールしていかなければならないと感じた」など活気あふれるご感想をいただきました。私自身も今回の未曾有の大震災を機に薬剤師の価値観が大幅に変わったように感じました。

(鹿鹿医療科学大学 薬学部 4年 藤戸淳夫)

西日本薬学生ネットワークとは?

薬学生の「知りたい」「興味がある」などをテーマとし、参加型のイベントを開催しています。また、現場で働いておられる薬剤師の方などにも参加していただき、交流を行いながら様々なお話をいただいています。これらばかりではなく、薬学生同士の「交流」「情報交換」を学年・大学の垣根を越えて行い、薬学生なら誰でも参加できるイベントを行っております。皆様のご参加をお待ちしています。

現在、西日本薬学生ネットワークでは、共に運営を行うスタッフを募集しています。お気軽にお問い合わせ下さい。

お問合せ先: westpharmacy@gmail.com



ICE BREAK(交流企画)



スモールグループディスカッション



講演会



交流会



スモールグループディスカッション